

初対面会話教育における重要項目の選定に関する考察

—母語話者・非母語話者に対する意識調査から—

田所 希佳子

【キーワード】 悪印象 違和感 難しさ スピーチレベル 話題選択

【要旨】

従来、初対面会話に関しては、スピーチレベル、話題選択、やりとりなど、様々な観点から研究されてきたが、教育において、どの項目が重要であるといえるのだろうか。従来の初対面会話教育では、母語話者の言語的特徴や母語話者と非母語話者の相違点が、重要項目とされてきた。しかし、非母語話者が自分らしく自己実現を果たすための日本語教育を目指す場合、相互行為の視点から、初対面会話教育の重要項目を再考察する必要がある。そこで、本研究では、母語話者と非母語話者を対象に、質問紙による意識調査を行った。

先行研究から導き出した7項目に関して、母語話者が非母語話者に対して悪印象や違和感を持つ項目と、非母語話者が難しいと感じる項目を、質問紙を用いて各50名を対象に調査した。統計分析の結果、以下の四点が明らかになった。

1) 母語話者が非母語話者に対して日常的に悪印象や違和感を持つ項目はない。重要項目選定の際は接触場面の規範緩和を考慮する必要がある。2) 非母語話者は【スピーチレベル】【話題選択】以外の項目においては、難しいと感じない。この二項目は特に注目すべきである。3) ほぼすべての項目において、難しいと感じる非母語話者は、悪印象や違和感を持つ母語話者よりも有意に多い。非母語話者の問題意識への注目は重要である。4) 【話題選択】は、悪印象や違和感を持つ母語話者が最も少ないのに対し、難しいと感じる非母語話者が最も多い。会話相手が初対面であり、また外国人であるため、非母語話者同様、母語話者にとっても難しく、寛容度が高くなり、悪印象や違和感が少なくなるのだと考えられる。非母語であることが要因となる項目だけでなく、非母語話者の第一言語においても、また母語話者にとっても難しい項目にも注目した上で、人と人とのコミュニケーションというより大きな観点から重要項目を選定していく必要があるといえる。

1. はじめに

日本語非母語話者（以下、「NNS」とする。）にとって、日本語話者と人間関係

を構築していくことは重要であり、その第一段階である初対面会話も重要であるといえる。従来、初対面会話に関しては、スピーチレベル、話題選択、やりとりなど、様々な観点から研究されてきた。しかし、それらの項目がなぜ選ばれたのか、なぜ初対面会話において重要だといえるのか、という理由は問われてこなかった。従来の日本語教育は、母語話者（以下、「NS」とする。）の言語的特徴や、NSとNNSとの相違点を教えることが目的だったため、それらを解明することが求められていたからである。NSを目標とし、NSに近づくための日本語教育を目指すのであれば、それらを初対面会話教育における重要項目と見なしてよいだろう。しかし、NNSが自分らしく自己実現を果たすための日本語教育を目指す場合、相互行為の視点から、初対面会話教育の重要項目を再考察する必要がある。そのために、本研究では、NS・NNSに対し、質問紙による意識調査を行った。

2. 先行研究と本研究の特徴

2.1 初対面会話に関する先行研究の概観

「初対面」をキーワードとして検索した文献の中で、日本語教育に関連すると判断したものと、それらの文献に先行研究として掲載されていたものを収集したところ、次のように大別できた。

【表1】初対面会話に関する先行研究の分類

項目	文献例
〈言語的要素〉 終助詞、自称詞、接続詞等	萩原（2008）、楊（2008）等
〈文体〉 スピーチレベル、スピーチレベルシフト	三牧（2002）、伊集院（2004）等
〈話題・内容〉 話題選択、自己開示	三牧（1999）、全（2010）等
〈やりとり〉 話題転換、話題導入、情報要求、ターン、発話量	宇佐美・嶺田（1995）、佐々木（1998）等
〈非言語行動〉 あいづち、うなずき、笑い	川名（1986）、大塚（2011）等

これらは概して、NSの言語的特徴やNSとNNSの相違点を解明してきた。それは、初対面会話の教育では、それらを学ぶことが、NNSにとって必要であると考えられてきたためである。例えば宇佐美・嶺田（1995）は、「このような会話のストラテジー[話題導入の頻度や形式・あいづち・スピーチレベルシフト・ターンテイキングなどの、いわゆる談話レベルにおける会話のストラテジー]は、文化によって異なることが多いため、様々な文化的背景を持つ日本語学習者にとっては、その用法を体系的に指導されなければ、気づきにくい点である。このような会話のストラテジーを日本語教育の中で指導していくには、まず日本人母語話者がどのようなストラテジーを用い、使い分けているかを明らかにしていく必要

がある。」(p.131)と述べている。このように、まずNSの言語的特徴を解明し、それを教育における重要項目と見なすという方向性があった。

2.2 問題提起

しかし、1990年代半ばからは、社会的成員としての学習者を重視した、「共生する」日本語教育へとパラダイムが転換した(佐々木 2006)。NNSの目標は、もはやNSのように話すことではなく、他者と意思疎通を図り、人間関係を構築、維持するという、より実質的な部分に重点が置かれるようになってきた。初対面会話の本来の目的も、NSのように上手に話すことではない。見知らぬ相手と情報を交換し、友好関係を築いていくことである。NNSはNSになれないし、なる必要もない(尾崎 2003)。それ故、2.1に挙げた先行研究において解明されたNSの言語的特徴を、そのままNNSの学ぶべき重要項目と判断することはできないのである。

2.3 本研究の特徴

それでは、NSとNNSの相互行為に注目した上で、初対面会話の重要項目を選定する際、何を基準として判断すればよいのだろうか。そのためには、言語そのものではなく、話し手と聞き手の意識の部分に注目する必要がある。話し手自身が何を意図し、それが実際に聞き手にどのように捉えられるのかというように、話し手と聞き手の意識を切り口にして、初対面会話の重要項目の選定をしていくべきであると考ええる。

聞き手の意識は、母語話者評価の一連の研究(小林 2004a)において注目されてきた。小林(2004b)は、「マイナス評価」はより具体的・個別的で、学習内容に還元することは比較的容易である反面、「プラス評価」は抽象的・全体的なコメントが多く、還元がより困難であると述べている。これをふまえ、本研究では、NSの聞き手としての否定的評価に注目し、NSがNNSのどのような点に対して悪印象や違和感を持つのかを解明していく。NSが悪印象や違和感を持ちやすい傾向のある項目は、NNSが学ぶ必要のあるものであると同時に、NSにとっても、聞き手としてより寛容になるべき重要項目であると判断できる。

さらに、母語話者評価は『学習者自身のあるべき姿』までも教師が決めて、その実現に向けて指導していくという図式につながりかねない危険性を有している。(横溝 2004, p.292)という弱点を補うために、学びの中心となるNNSにも目を向ける必要がある。そこで、話し手としてのNNSの意識にも注目し、話し手のNNSがどのような点を難しいと感じ、問題意識を抱いているのかという点も、解明していくこととする。

3. 目的

本研究では、以上をふまえ、以下の三点の研究課題を設定した。

研究課題 1. 日常的に NNS と知り合う機会を持つ NS が、初対面の NNS に対して悪印象や違和感を持つ項目は何か。

研究課題 2. NNS が日常の NS との初対面会話において難しいと感じる項目は何か。

研究課題 3. NS の持つ悪印象や違和感と、NNS の感じる難しさには、どのような関連があるか。

4. 研究方法

寮や学校など、日常生活において NNS と知り合う機会を持っている NS と、日本で生活している中級以上の NNS 各 50 名を、寮の掲示板や知人を通じて募集し、質問紙調査を行った。NNS の日本語レベルは、本人の自己判断及び日本滞在歴、日本語学習歴から総合的に判断した。

NS の性別は、男性 16 名・女性 34 名、身分は大学生 10 名・大学院生 36 名・その他 4 名であった。年齢は、10 代が 1 名、20 代が 44 名、30 代が 4 名、40 代が 1 名と、20 代が中心になっている。なお、日本語教師の評価は一般の NS とは異なる (小池 1998) ため、日本語教育関係者は対象外とした。

NNS の性別は、男性 15 名・女性 35 名、身分は大学生 10 名・大学院生 39 名・その他 1 名であった。年齢は、10 代が 2 名、20 代が 41 名、30 代が 7 名と、NS 同様 20 代が中心になっている。母語は中国語 32 名・韓国朝鮮語 11 名・アジア他言語 1 名・欧米語 6 名である。日本滞在歴は平均 2 年 10 カ月、日本語学習歴は平均 3 年 7 カ月であった。

2.1 で挙げたような、初対面会話に関する先行研究の知見をふまえ、【ですます体・敬語】【普通体】【あいづち表現】【あいづち・うなずき】⁽¹⁾【話題選択】【話題転換】【質問・応答】に関する 7 項目の設定問を設けた。質問紙の詳細は巻末の〈参考資料〉を参照されたい。その 7 項目に関して、NS には、相手の NNS に対して悪印象・違和感を持つ項目を、NNS には、普段難しいと感じる項目を選択してもらった。なお、店員と客などの一時的な人間関係の初対面会話ではなく、今後友好関係を築いていくことを前提とした継続的な人間関係の初対面会話に限定するため、今後同じ寮やゼミ、授業で会う相手と、親しくなるために初めて日本語で会話をする時を思い浮かべながら答えるよう指示した。設問の解釈による差異が生じないよう、調査時は調査者が立ち会うか、立ち会えない場合は電話やメールにより補足説明を行った。

一つ目と二つ目の項目である【ですます体・敬語】と【普通体】については、【スピーチレベル】として一括りにすることが可能であるため、【ですます体・敬語】【普通体】のどちらか一方または両方に「はい」と答えたものを【スピーチレ

ベル】の「はい」、どちらにも【いいえ】と答えたものを【スピーチレベル】の「いいえ」として併せて結果を示すこととする。

5. 結果

項目別の回答者数の内訳は、以下の表2の通りである。

【表2】項目別の回答者数

	<NS> 悪印象や違和感を持つ			<NNS> 難しさを感じる		
	はい	いいえ	計	はい	いいえ	計
ですます体・敬語	15	35	50	18	32	50
普通体	5	45	50	16	34	50
あいづち表現	3	47	50	9	41	50
あいづち・うなずき	2	48	50	9	41	50
話題選択	1	49	50	22	28	50
話題転換	1	49	50	12	38	50
質問・応答	2	48	50	9	41	50
スピーチレベル	18	32	50	22	28	50

この結果が統計的に有意であるのか、以下に分析を行う。

5.1 NSがNNSに対して悪印象や違和感を持つ項目

【表3】各項目に対する回答の比率の差（NS群）

	ですます体・敬語	普通体	あいづち表現	あいづち・うなずき	話題選択	話題転換	質問・応答	スピーチレベル
χ^2 値	8.00 **	32.00 **	38.72 **	42.32 **	46.08 **	46.08 **	42.32 **	3.92 *
df	1	1	1	1	1	1	1	1

* = $p < .05$ ** = $p < .01$

NSがNNSに対して悪印象や違和感を持つ項目を χ^2 検定によって分析した結果、NS群は、すべての項目で、「いいえ」と答えた人が「はい」と答えた人よりも有意に多かった（表3）。つまり、日常的にNSが悪印象や違和感を持つ項目は特にないといえる。

5.2 NNS が難しいと感じる項目

【表 4】各項目に対する回答の比率の差 (NNS 群)

	ですます 体・敬語	普通体	あいづち 表現	あいづち・ うなずき	話題選択	話題転換	質問・ 応答	スピーチ レベル
χ^2 値	3.92 *	6.48 *	20.48 **	20.48 **	0.72	13.52 **	20.48 **	1.28
df	1	1	1	1	1	1	1	1

* = $p < .05$ ** = $p < .01$

NNS が難しいと感じる項目を χ^2 検定によって分析した結果、NNS 群では、【話題選択】と【スピーチレベル】という 2 項目以外のすべての項目で、「いいえ」と答えた人が「はい」と答えた人よりも有意に多いことが分かった (表 4)。つまり、NNS は、【話題選択】と【スピーチレベル】以外の項目において、難しいと感じていないことが分かった。

5.3 NS の持つ悪印象や違和感と NNS の感じる難しさとの関連

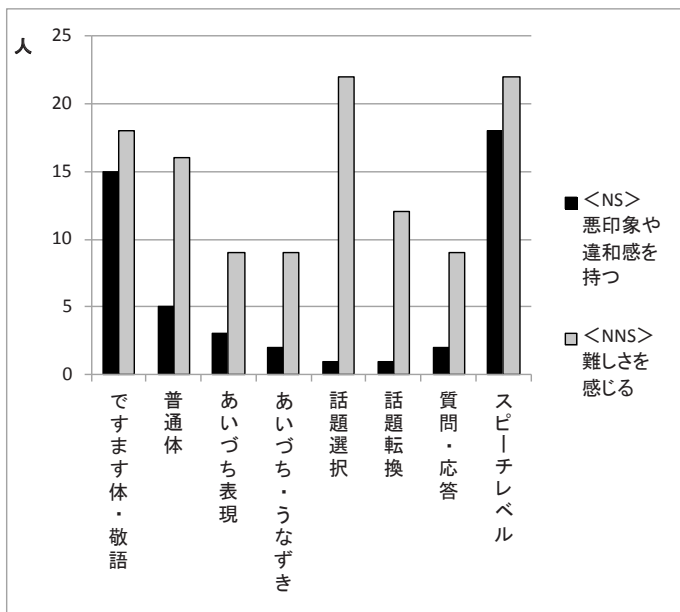
【表 5】各項目に対する回答の比率の群間差

	ですます 体・敬語	普通体	あいづち 表現	あいづち・ うなずき	話題選択	話題転換	質問・ 応答	スピーチ レベル
χ^2 値	0.41	7.29 **	3.41	5.01 *	24.90 **	10.70 **	5.01 *	0.38
df	1	1	1	1	1	1	1	1

* = $p < .05$ ** = $p < .01$

NS の持つ悪印象・違和感と、NNS が感じる難しさが関連しているかどうかを χ^2 検定によって分析した結果、【スピーチレベル】、特に【ですます体・敬語】と、【あいづち表現】以外のすべての項目において、NS 群で「いいえ」と答えた人の方が、NNS 群で「いいえ」と答えた人よりも有意に多いということが分かった (表 5)。【ですます体・敬語】は、悪印象・違和感を持つ NS と、難しいと感じる NNS が共に比較的多く、逆に【あいづち表現】に関しては、悪印象・違和感を持つ NS と、難しいと感じる NNS が共に比較的少なかった。そのため、群間差が有意にならなかったと考えられる。しかし、それ以外の項目では、悪印象・違和感を持つ NS が、難しいと感じる NNS よりも有意に少ないという関連が見られた。

また、【話題選択】の項目に関しては、悪印象・違和感を持つ NS と難しいと感じている NNS の差が特に大きいという点で特徴的であった。これは、以下の図を見ても明らかである。



【図】項目別の回答者数

6. 考察

以上の結果をまとめると、研究課題1では、NSはどの項目においても、NNSに対して悪印象や違和感を有意に持っているとはいえなかった。研究課題2では、NNSは、【話題選択】と【スピーチレベル】以外の項目において、難しいと感じない人が感じる人よりも有意に多かった。研究課題3では、ほぼすべての項目において、難しいと感じるNNSが、悪印象や違和感を持つNSよりも有意に多かった。また、【話題選択】に関しては、悪印象・違和感を持つNSと難しいと感じるNNSの差が特に大きいという点で特徴的であった。以下、それぞれについて考察を行う。

まず、研究課題1の、NSが悪印象や違和感を持つ項目が特にないという結果が得られた要因には、接触場面における規範の緩和（加藤 2010）が影響していると考えられる。つまり、母語場面では悪印象や違和感を与えることでも、接触場面ではより緩和された規範が適用されるため、問題にならない場合があるということである。原田（1998）は、「一般の日本人は学習者の悪かった点よりも良かった点に目を向ける傾向がある」（p.157）と述べている。NNSが「悪かった点」があったとしても、それが常に悪印象や違和感には至るとは限らない。だとすれ

ば、それをコミュニケーション上の「悪かった点」とは判断できない。会話教育上の重要項目と見なすこともできない。従来、初対面会話教育においては、NSとNNSの相違点が解明され、NSの言語的特徴の習得が目指されてきた。NNSがNSの言語的特徴を習得することが望まれてきた。しかし、NNSにNSとは異なる言語的特徴があるとしても、NSに悪印象や違和感を与えるというわけではないという事実が明らかになった。接触場面における規範の緩和を考慮した上で、重要項目を選定する必要があるといえよう。

ただし、本研究は、日常的に知り合うNNSに対するNSの全般的な意見に限定しているため、一つ一つの会話、一つ一つの局面というよりミクロな視点で引き続き調査を行い、今回の結果と関連づけていく必要があるといえる。

研究課題2の、【話題選択】と【スピーチレベル】以外の項目において、NNSは難しいと感じないという結果からは、先行研究において盛んに研究されてきた【話題選択】と【スピーチレベル】という項目は、やはり無視できない項目であるといえる。ただし、その難しさがNSの言語的特徴の未習得によるものであると早計してはいけな。NNSの感じる難しさには、非言語であることの他に、相手が初対面であること、相手が外国人であることという、接触場面初対面会話という状況も影響しているはずである。【話題選択】と【スピーチレベル】という二項目に関して、NNSの感じる難しさの要因を、より詳細に調査していく必要がある。

研究課題3は、【スピーチレベル】、特に【ですます体・敬語】と、【あいづち表現】以外の項目において、難しいと感じるNNSは、悪印象・違和感を持つNSよりも多いという結果であった。つまり、聞き手のNSが悪印象や違和感を持たない場合でも、話し手としてのNNSには問題意識がある場合がある。また、発話する前に困難を感じ、回避した結果、聞き手に悪印象や違和感を与えないという場合もある。会話の結果として現れる言語的特徴や聞き手の評価だけではなく、会話の結果として表に現れない話し手の意識も調査・分析することが、重要項目の選定には必要であることが示唆された。

また、【話題選択】に関して、悪印象・違和感を持つNSは最も少なかったのに対し、難しいと感じるNNSは最も多く、群間差が顕著に大きくなっていったのは特徴的であった。【話題選択】は、全項目の中で唯一、「どう話すか」ではなく「何を話すか」という項目である。どのように上手に、NSのように話すかということよりも、何を話し、自分に関する情報を伝え、相手との人間関係を構築していくかという点が重要になってくる。これには、前述のように、NS・NNSという相違、NNSにとって日本語が非母語であるという要因の他に、接触場面である上に、初対面であるという状況も影響しているはずである。つまり、異文化間コミュニケーション能力や、ソーシャルスキル、人間性といったより総合的な要因も影響を与えていると考えられるため、最も難しい項目となったのではないだろ

うか。さらに、そうだとすると、これは NS にとっても同様に難しい問題となる。それ故、NS の寛容度・許容度が高くなり、NS の持つ悪印象や違和感が最も少なくなっただけで、群間差が顕著に大きくなったのだと考えられる。

従来、初対面会話教育においては、非母語であることが要因となっている問題に焦点が当てられてきた。NNS が NS の言語的特徴を習得していないことを問題視し、重要項目として扱ってきた。しかし、本研究の結果から、NNS が NS と異なる言語的特徴を持っていたとしても、相手の NS の持つ悪印象や違和感に有意に影響しているわけではないといえる。また、NS の持つ悪印象や違和感よりも、話し手の NNS 自身の感じる難しさの方が有意に大きかった。難しさには、非母語であること以外に、相手が初対面且つ外国人であることも影響している。NNS の第一言語においても難しい項目、NS にとっても難しい項目にも注目した上で、NS・NNS である以前の、人と人としてのコミュニケーション教育にも目を向け、重要項目を選定していく必要があるといえる。

今後はよりミクロな視点で、一つ一つの会話、会話の一つ一つの局面における悪印象や違和感の要因、難しさの詳細について解明し、今回の研究結果と関連づけていきたい。また、本研究では、NS の持つ悪印象や違和感と、NNS の感じる難しさに注目したが、NNS が NS に対して悪印象や違和感を持つ項目や、NS が難しいと感じる項目についても明らかにすることによって、NS の異文化間コミュニケーション力育成のための示唆も得ていきたいと思う。

【注】

- (1) 【あいづち表現】は、あいづち表現のバリエーションという「表現」に関する設問であり、【あいづち・うなずき】はあいづちとうなずきの量・タイミングという「行為」に関する設問であるという点で異なる。

【参考文献】

- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』第 6 巻第 2 号, 社会言語学会, 12-26.
- 宇佐美まゆみ・嶺田明美 (1995) 「対話相手に応じた話題導入の仕方とその展開パターン—初対面二者間の会話分析より—」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』第 2 号, 名古屋学院大学留学生別科, 130-145.
- 大塚容子 (2011) 「初対面の 3 人会話におけるあいづち—ラポール構築の観点から—」『岐阜聖徳学園大学紀要』第 50 号, 岐阜聖徳学園大学, 85-95.
- 尾崎明人 (2003) 「接触会話の研究から会話の教育へ—電話会話の終結部に見られるコミュニケーション問題を中心に—」宮崎里司／ヘレン・マリオット編著『接触場面と日本語教育—ネウストブニーのインパクト』明治書院, 69-84.

- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション—日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範』 東海大学出版会。
- 川名好裕 (1986) 「対話状況における聞き手の相づちが対人魅力に及ぼす効果」『実験社会心理学研究』第 26 号, 日本グループ・ダイナミクス学会, 67-76.
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」『北海道大学留学生センター紀要』第 2 号, 北海道大学留学生センター, 138-155.
- 小林ミナ (2004a) 『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成 12-15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究報告書 [課題番号 12480058]
- 小林ミナ (2004b) 「「プラス評価」と「マイナス評価」の質的相違からみた教育現場への還元可能性」小林ミナ編『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成 12-15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究報告書 [課題番号 12480058], 275-285.
- 佐々木倫子 (2006) 「パラダイムシフト再考」国立国語研究所編『日本語教育の新たな文脈—学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性—』アルク, 259-283.
- 佐々木由美 (1998) 「初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話—同文化内および異文化間コミュニケーションの場面—」『異文化間教育』第 12 号, 異文化間教育学会, 110-127.
- 全鍾美 (2010) 「初対面会話における韓国日本語学習者の自己開示の研究」『小出記念日本語教育研究会論文集』第 18 号, 小出記念日本語教育研究会, 5-22.
- 萩原孝恵 (2008) 「人間関係と接続詞「だって」の使い方」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』第 3 集, 昭和女子大学, 37-54.
- 原田明子 (1998) 「一般の日本人は外国人の日本語をどのように評価するか」『北海道大学留学生センター紀要』第 2 号, 北海道大学留学生センター, 157-167.
- 三牧陽子 (1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー—大学生会話の分析」『日本語教育』第 103 号, 日本語教育学会, 49-58.
- 三牧陽子 (2002) 「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のボライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に」『社会言語科学』第 5 巻第 1 号, 社会言語科学会, 56-74.
- 楊 虹 (2008) 「中日接触場面の初対面会話における「ね」の分析：共感構築の観点から」『研究紀要』第 15 号, 東京成徳大学, 125-136.
- 横溝紳一郎 (2004) 「日本語母語話者評価に関する研究結果を教育・研究にどう活かすのか？」小林ミナ編『日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか』平成 12-15 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 研究報告書 [課題番号 12480058] 286-307.

<参考資料>

資料1 NSを対象とした質問紙

以下について、これから同じ寮に住む、または同じゼミに所属する、同じ授業を受講する留学生（意思疎通可能なレベル）と、親しくなるために初めて日本語で会話をする時を思い浮かべながら教えてください。

そのような初対面会話において、相手の留学生に対して気になること、違和感や悪印象を持つことがありますか。以下で当てはまるものすべてに○をつけてください。

- 特にない。
- Q1 ですます体や敬語を使いすぎる。
- Q2 普通体や友達言葉を使いすぎる。
- Q3 あいづち表現のバリエーションが少ない。
- Q4 あいづちやうなずきのタイミング、量が不自然。
- Q5 話題が不適切。
- Q6 話題の変え方が下手。
- Q7 質問と応答のやりとりのバランスが悪い。
- その他 ()

資料2 NNSを対象とした質問紙

以下について、これから同じ寮に住む、または同じゼミに所属する、同じ授業を受講する日本人と、親しくなるために初めて日本語で会話をする時を思い浮かべながら教えてください。

そのような初対面会話において、難しいことは何ですか。以下の当てはまるものすべてに○をつけてください。

- 特にない。
- Q1 ですます体や敬語をどのくらい使えばよいのか。
- Q2 普通体や友達言葉をどのくらい使えばよいのか。
- Q3 あいづち表現のバリエーション。
- Q4 あいづちやうなずきのタイミング、量。
- Q5 どのような話題を選べばよいのか。
- Q6 話題の変え方。
- Q7 質問と答えのやりとりのバランス。
- その他 ()